

国語

現代文領域（近代以降の文章）

出典 外山滋比古『異本論』／移り変り／（ちくま文庫）

解答

① ①
② ②

③ ③
④ ④
⑤ ⑤
⑥ ⑥
⑦ ⑦

解説

① A、直前の段落で述べられているのは、「動物的移動」。空所は「この」という指示語を受けている。したがって、ここは「動物的」である。B、空所直後に「移植と考えるべき」とある。空欄Aの次の段落に「植物的移動、普通に移植と言われるもの」とある。したがって、ここは「植物的移動」である。C、書物の移動について言及した箇所。傍線部Aの次の段落に「書物の形をとっているために、物理的移動のように扱われやすい」とある。したがっ

て、ここは「物理的」である。よって、④が適切。

② I、移植の手順を説明した箇所。「根を掘り起し」はその手順の第一である。したがって、ここは「まず」がよい。II、水平空間の移動を時間軸に転換しても「移植は考えられる」と述べている箇所。水平と同様にやはり時間軸でも同じだという文脈である。したがって、ここは「やはり」がよい。III、直前で「時の審判」を受けた作品は普遍的価値をもつと述べられている。しかし、その審判を受ける前の作品は後世の人に否定され得るとある。前件から後件への展開は逆接。したがって、ここは「ところが」がよい。IV、直前で文学作品は時間の経過によって注目されなくなると述べられている。それを「移植にともなう雌伏」と言い、そういうわけで作品自体は存在感を失い「冬眠状態に入る」と続く。ここは「そういうわけで」という理由展開を示す接続詞がふさわしいので「そこで」がよい。よって、②が適切。

③ 二つ後の段落に「移植してまったく同じ……変化させざるを得ない」とあることに着目。ここでは「外国の作品」という「遠くで生れた表現」について述べているが、空所IIの段落で文学作品の「歴史的移植」へ話題が移っている。③がこの内容に合っている。

④ 傍線部後に「新しい読者からも興味をもたれるようになったところで古典が誕生する」とある。古典作品に必要なのは新しい読者の興味である。そして、傍線部前の段落に「生命のつよい作品はやがて春を迎えて」とあるように、「再生を迎える」のは生命力のつよい作品だとわかる。よって、⑤が適切。

⑤ 傍線部直後に、「もとの読者が知らなかったことを後世の読者はいろいろ知っている」とある。つまり、後世の読者は古典を熟知して享受する。また、非当事者である後世の読者は、演劇における観客と同じであるから、二段落前の「予め事態を知らされている」と同じ。したがって、当事者である「書かれた当時の読者が未体験のことを」、後世の読者は「予見」して楽しむことができる。よって、この主旨を説明する②が適切。

⑥ 傍線部の次段落に「抒情詩は可変部がきわめて大きい」とある。そして、そのことで「コンテキストによって異本が

いくらでもできる」と続く。「コンテキストによって」というのは、傍線部の三段落前(三段落後にも)にあるように「コンテキストによって情報が補充され」ることだが、可変部が大きければ、情報の補充は必然的に多くなる。その結果、異本がたくさんできる。そして、傍線部の次段落に「だれが読んでも身にしみる。いつの時代になっても古く、ならない」とあるように、時代や社会を超越して万人に作品が享受されることになる。よって、この主旨を説明する①が適切。

⑦ 最後から三つ目の段落に「われわれは、個人としても、時代、社会としても、それぞれコンテキストをもって生きている」と述べられている。「時代、社会としても」とあるのは、その「個人」が時代、社会から影響を受けていることを表す。そして、その次段落に「自分のコンテキストに引き入れて解釈する」ことについては、対象を「あるがまがわかることはあり得ない」とある。よって、この主旨を説明する④が適切。

二

出典 高村光太郎「智恵子の半生」(『日本現代文学全集16 高村光太郎・宮澤賢治集』講談社)

解答

⑧ ①

⑨ ③

⑩ ③

⑪ ④

⑫ ④

⑬ ⑤

⑭ ②

解説

⑧ 空所が受ける「そういうもの」は、「そういう」の直前にある「公式の理念」「壮大な民族意識」である。ま

た、空所と並列される言葉として「動機」とある。「動機」と並んで「公式の理念」や「壮大な民族意識」を作品とかわらせる言葉とすれば、それはそういったものの見方や精神が形となったものということになる。よって、①「主題」が適切。

⑨ 傍線部の「一人に極まれば」は、一人物について詳細に記述することを表し、「万人に通ずる」は、その記したものが多くの人の共感を得るだろうという意味に解される。これが四・五行前の「いわば単なる私生活の報告のようなものに果してどういう意味があり得るかという疑問」に対する筆者なりの答えになっている。したがって③が適切。

⑩ 引用された「あどけない話」という小詩の二段落後の冒頭に、智恵子の「精神の破綻を来すに至った更に大きな原因」として、「猛烈な芸術精進と、私への純真な愛に基づく日常生活の営みとの間に起こる矛盾撞着の悩みであったであろう」と記されている。「猛烈な芸術精進」については、その次段落に「彼女は最善をばかり目指していたので……いつでも作品は未完成」とある。また、「私への純真な愛に基づく日常生活の営みとの間に起こる……悩み」については、さらに次段落に「彼女はどんな事があっても私の仕事の時間を減らすまいと」して「私」の仕事を守ろうとした旨が記されている。よって、「芸術精進」と「私」への献身からという主旨の③が適切。

⑪ A、「別な生活を想像してみる」例として、空所後に郷里や田園を挙げている。したがって、「例えば」がよい(④)。B、「郷里」と「どこかの田園」を並記している。したがって、「または」という意味にあたる「また」「あるいは」がよい(①・③・④)。C、智恵子の別な生活の想定として、他の土地で生活することのほかに、配偶者が「私」でない場合を想定している。したがって、「ほかに」という意味にあたる「また」「あるいは」(②・④・⑤)がよい。D、「美術に理解ある他の職業の者」として、その典型的な例として「農耕牧畜に従事」する者を挙げている。したがって、「典型的に」「格別に」に相当する「殊に」がよい(④)。E、智恵子が別な生活をしていれば、もしかして「天然の寿を全うし」たかもしれないと述べている。したがって、「もしかして」にあたる「あるいは」がよい(②・④)。よって、④が適切。

12 傍線部の「鬱積するものを世に訴え」とは、心の内面に蓄積されたものを絵画といった形にして、他者に見せることを言うが、それが「発散」になるというのは、その自身の内面を形にした作品を認めてもらうことによる。傍線部前で、智恵子が出した作品が「鑑査員の認めるところとなら」なかった逸話が紹介されているが、これは共感が得られなかったことを表す。そして、智恵子はそれを契機として「精神の内攻的傾向」を強めていく、つまり、精神的安定を失う。よって、共感を求めることで精神的安定を得るという主旨で説明する④が適切。

13 傍線部前に智恵子の芸術に対する姿勢が述べられている。そこには「自己の最高の能力を常に物に傾注した。……突きつめるだけ突きつめて考えて……妥協を卑しんだ。……彼女のこの内部生活の清浄さ」とある。そして、このよう

な心で見る「彼女の眼には確かに阿多羅山の……」と傍線部へ続く。よって、この主旨で説明する⑤が適切。

14 第三段落に「智恵子はその個的存在を失う事によってかえって私にとっては普遍的存在となった……私にとっての永遠なるものであるという実感の方が強くなった」とある。よって、この主旨を説明する②が適切。

三 解答

15 ②

16 ①

17 ⑤

18 ④

19 ③

20 ④

21 ①

22 ⑤

23 ②

24 ①

1 傍線部「……」は、心の内面に蓄積されたものを絵画といった形にして、他者に見せることを言うが、それが「発散」になるというのは、その自身の内面を形にした作品を認めてもらうことによる。傍線部前で、智恵子が出した作品が「鑑査員の認めるところとなら」なかった逸話が紹介されているが、これは共感が得られなかったことを表す。そして、智恵子はそれを契機として「精神の内攻的傾向」を強めていく、つまり、精神的安定を失う。よって、共感を求めることで精神的安定を得るという主旨で説明する④が適切。

2 傍線部前に智恵子の芸術に対する姿勢が述べられている。そこには「自己の最高の能力を常に物に傾注した。……突きつめるだけ突きつめて考えて……妥協を卑しんだ。……彼女のこの内部生活の清浄さ」とある。そして、このよう

な心で見る「彼女の眼には確かに阿多羅山の……」と傍線部へ続く。よって、この主旨で説明する⑤が適切。

3 第三段落に「智恵子はその個的存在を失う事によってかえって私にとっては普遍的存在となった……私にとっての永遠なるものであるという実感の方が強くなった」とある。よって、この主旨を説明する②が適切。

4 傍線部「……」は、心の内面に蓄積されたものを絵画といった形にして、他者に見せることを言うが、それが「発散」になるというのは、その自身の内面を形にした作品を認めてもらうことによる。傍線部前で、智恵子が出した作品が「鑑査員の認めるところとなら」なかった逸話が紹介されているが、これは共感が得られなかったことを表す。そして、智恵子はそれを契機として「精神の内攻的傾向」を強めていく、つまり、精神的安定を失う。よって、共感を求めることで精神的安定を得るという主旨で説明する④が適切。

5 傍線部前に智恵子の芸術に対する姿勢が述べられている。そこには「自己の最高の能力を常に物に傾注した。……突きつめるだけ突きつめて考えて……妥協を卑しんだ。……彼女のこの内部生活の清浄さ」とある。そして、このよう

な心で見る「彼女の眼には確かに阿多羅山の……」と傍線部へ続く。よって、この主旨で説明する⑤が適切。

6 第三段落に「智恵子はその個的存在を失う事によってかえって私にとっては普遍的存在となった……私にとっての永遠なるものであるという実感の方が強くなった」とある。よって、この主旨を説明する②が適切。